

地域のかお シリーズ89

「親子の絆が起こした奇跡」

旭町児童館

館長 吉野 裕喜

皆さんは「自閉症」という障がいをご存知ですか？これまで、「自閉症」の子どもたちは、他人と会話することができず、自分の気持ちや意思を表現し伝えることができないと思われてきました。そのため、自閉症の子どもが急に叫んだり走り出したりしても、その理由を話すことができず、両親でさえ子どもが何を考えているのか全く分からないことが一般的でした。自閉の世界はまさに謎だらけで見た目では理解することが難しく、不思議な目でそんな子どもたちを見るしかありませんでした。

しかし、最近になってこの謎が少しずつ明らかになってきました。それは、東田直樹さんという自閉症の作家が出した「自閉症の僕が跳びはねる理由」という本によるものです。この本は30言語に翻訳され、世界的なベストセラーになりました。また、イギリスで映画化され、日本でも公開されています。世界的にこれほど大きな反響を受けているのは、自閉症の子どもたちの内面を知る手がかりがこれまで全くなかったからです。著者の東田直樹さんは、本の中でこのように説明しています。～「みんなが当たり前に行っている人との会話や『ジッとしていること』が僕には難しい。それは自閉症という障がいのためなんだ。誰かに話したいことを考えているうちに頭の中で言葉が消えていってしまう・・・伝えたいのに伝えられない苦しい気持ち、想像できる？僕はみんなと少し違う。でも同じ世界の一員として、一緒に歩いているよ。」～

では、なぜ自閉症の東田さんが、作家になることができたのでしょうか？それは、生まれた時からずっと、傍に寄り添ってきたご両親の大きな愛情が



【東田直樹さん(右)とお母さん】

あったからです。特にお母さんは、直樹さんが文字に興味を持っていることを発見すると、長い時間をかけて文字を覚えさせました。鉛筆を持った直樹さんの手をお母さんが上から握って、何度も何度も繰り返し練習しました。直樹さんも自分の本当の言葉を分かって欲しいと言う強い思いで頑張り続けました。そうして、少しずつ筆談することができるようになっていきました。

しかし、それだけでは自分の力で人とコミュニケーションをすることはできません。そこで、お母さんは直樹さんに文字盤を与えました。文字を指すことで言葉を伝えられる文字盤は、話そうとすると消えてしまう直樹さんの言葉を、つなぎとめておくきっかけになってくれました。それでも会話ができるようになるまでには、何度も何度も挫折を繰り返しました。しかしご両親やご家族の大きな愛に支えられ、家族の絆で「自閉症」という障がいを乗り越える奇跡が起きたのでした。

直樹さんは「僕が生まれたことで家族の誰にも不幸になって欲しくないと思います。」「自分が辛いのは我慢できます。しかし、自分がいることで周りを不幸にしていることに耐えられないのです。」と家族を思います。また「この世に区別されるべき人はいません。障がいがあってもなくても、社会の中で自分らしく生きていけることが僕の願いです。」「障がいのあるなしに関わらず人は努力しなければいけないし、努力の結果幸せになれることが分かりました。」「自分を好きになれるなら、普通でも自閉症でもどちらでもいいのです。」と自分を思います。「自閉症」を自分の個性として受け入れ執筆活動を続ける直樹さんは、これからも自分の思いを文字に変え、私たちに届けてくれることと思います。

「世界を変えた30歳未満の人」に大谷翔平選手と並び選ばれた東田直樹さんの今後の活躍が楽しみです。ちなみに、今回紹介した「自閉症の僕が跳びはねる理由」の本は、児童館にもあります。他者理解と共生について考えるきっかけとして是非読んでみてください。

